

報 告

マンガ・ビジュアル研究会報告書

スチュワート ロナルド

マンガ・ビジュアル研究会（マンビ研）の2024年度活動

マンガ・ビジュアル研究会（以下「マンビ研」）は、大東文化大学の社会学研究所に所属している研究会である。視覚文化に共通の関心を持っているメンバー（現在の会員9人）からなっている。マンビ研の関心はマンガを中心に、アニメ、ゲーム、映像メディアなどまで広がっている。今年度の課題として、このような視覚文化を活用したダイバーシティ教育の可能性について主に研究関心を向けている。マンビ研でこうした研究を本格的に継続するため、今年度に研究助成金の申請書を作成し、提出した。また、ゲストスピーカーを招いた勉強会も2回開催した。1回目はDE&I（ダイバーシティ&エクイティ&インクルージョン）課題を取り組んだテレビドラマの制作と反応についてである。2回目は性的マイノリティを中心にストーリーが展開するBLについて、複数メディアやジャンルを対象に歴史を含めた研究をする意義についての発表であった。以下はこれらの勉強会の報告である。

マンビ研勉強 ① 視覚文化：ドラマ

ゲスト：尾崎裕和氏 NHK コンテンツ制作局第3制作センタードラマチーフ・プロデューサー
テーマ：「朝ドラ『虎に翼』からDE&Iを考える」

開催：2024年11月21日（木）15:00-16:30 板橋校舎3号館5階ワークルームⅠ

今回の勉強会では、2024年4月1日から9月27日までNHK連続テレビ小説（通称「朝ドラ」）として放送された「虎に翼」のチーフ・プロデューサー尾崎氏がその計画、制作、作品の社会的な意義、そしてその評価について発表した。尾崎氏によると朝ドラは通常1年から1年半かかる。今回は、歴史的に女性の社会進出がいかにも制限されてきたかをテーマにしたかったという。そこで日本初の女性弁護士、三淵好子（1914年～1984年）という実存していた人をモデルに主人公、猪爪寅子にした。三淵は戦後に判事および裁判所長にもなったが、当時の日本では女性にとって法曹界に入るのが困難だった時代であった。このようなキャリアを追求する女性の描写を中心にして、ドラマで展開することにより、現代日本社会に根強く残る差別および不平等の根深さを浮き彫りにして、話題となり、時には議論の対象となった。ドラマ全体の基本コンセプトは、日本国憲法第14条に書かれている「すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」という国民の平等を保守するところである。この条文はドラマの序盤で登場するが、これが含まれた憲法が公布されたとき、三淵自身は自由を感じたという。尾崎氏は、視聴者の反応について、視聴率、質的調査、「NHK プラス」配信のデータおよびインターネット・SNSの話題など複数の方法で測ったという。

尾崎氏の制作発表後の質疑で注目されたのは、「虎に翼」にあった性的マイノリティの描写である。ドラマの21週間に同性愛カップル、その一人は性転換手術を受けた人が登場していくつかのLGBTなどの問題にスポットライトを当てた。物語の中にこの問題を導入するのは、一部の視聴者の

間で波紋を呼び、ネット上で意見が分かれて議論になった。尾崎氏よると計画する際、専門家に連絡し、実際に戦後間もない性転換手術があったことを確認した。そして、勉強会の質問時間で性的マイノリティである登場人物のキャスティングをする際に、俳優・女優の当事者性と演技が議論されて、映画などにおける異なる「人種」、障害者、職業などの描写と当事者への差別などについて、そして女性に対する性的虐待の描写と視聴者の反応について話題を広げて意見を交わした。尾崎氏はドラマがすぐ社会を変える力があると思っていないが、このドラマのように社会問題を取り上げるドラマを発表することにより社会がもう少しポジティブな方向に変わると希望している。

マンビ研勉強 ② 視覚文化：マンガ (BL)

ゲスト：堀あきこ氏 関西学院大学社会学部助教（「BLの教科書」編者）

テーマ：なぜBL研究なのか：ジェンダーとセクシュアリティの視点から

日程：2024年12月21日（土）13:30-15:10 Zoom開催

2024年度の第2回勉強会の講師、堀あきこ氏のボーイズラブ（通称BL）メディアに関連する研究成果は10年半以上前から続いている。業績の中に、執筆した本『欲望のコード：マンガにみるセクシュアリティの男女差』（2009年）と編集した研究書『BLの教科書』（2020年）がある。堀氏は今回の発表を大きく2つのパートに分けた。ひとつはBLメディアの歴史、その変遷と広がりである。もう一つは、BL研究の重要性を論じ、特にジェンダーとセクシュアリティという2つの視点に焦点を当てた。BLは主に女性が作り、女性が消費することから、女性の文化だと考えられていると説明した。

BLというジャンルのルーツは1970年に始まった少年愛マンガであり、男性同士の関係に焦点を当てながら、竹宮恵子や萩尾望都のような作家がジェンダーの規範や制約に抵抗する手段であった。その後、このジャンルは専門誌で取り上げられるようになり、その代表的なものが70年代後半のゲイ雑誌と関連した『JUNE』誌である。また同時期に「やおい」として同人誌の二次創作・パロディ文化の大部分を占めるようになった。90年代初頭には、出版社もこの人気に注目し、商業的なBLジャンルが生まれたが、たいていは軽いテーマとハッピーエンドだった。その後、BLというジャンルは常に変化し、多様化し続けている。現在、マンガにとどまらず、小説、実写ドラマおよび映画など多メディアに及び、「BL」を定義したり、他のLGBTQメディアとはっきり区別したりするのが難しくなった。この日本発信のBL文化は、特に2010年代に入ると、タイ、フィリピン、中国、台湾、ベトナム、韓国などの海外の国と地域にも広がりつつある。そして、海外で新たな形に変化したBLメディアが日本へ逆輸入され、日本のBL表現に影響を及ぼしている。堀氏はこの現象は一種の「グローカライゼーション」だと指摘した。

BL研究の重要性を論じることとなると、堀氏がBLを通じてこうしたメディアの歴史と現状の研究が可能と主張した。例えば、メディアの変遷、さまざまなメディア媒体の特徴、二次創作と類似した海外の現象SLASHなどの比較、そしてBLのグローバリゼーションとローカライゼーションなどを研究できる。堀氏の主な研究関心はBL文化を、ジェンダー視点とセクシュアリティ視点から見えてくる社会問題を探ることである。ジェンダー視点からの研究問題の例として、BLは女性文化だがなぜ作品に女性が二次的な存在しかないのか、なぜ女性が自分の性別の役あるいはキャラクターが現れない作品を楽しむのかなど挙げた。セクシュアリティ視点から考えられる問題は、なぜ女性読者は男性の性的描写を楽しむのか、BL表現はゲイ男性に対して差別的な表現であるのかなどである。最後に堀氏

がBL関連事件の実例を通じて見えるジェンダー規範、性の二重基準、男女不平等、ホモフォビア、そして有害図書指定の基準と実施の恣意的さという社会問題を紹介した。BL表現がゲイ差別かどうかに関して、ゲイ男性の日常的に向かう問題とかけ離れているBLの物語で彼らが他者化される可能性があると認めながら、BL作品は社会が異性愛を中心に構成されていることに気づかせることができる。そして、ゲイ差別を描写するBL作品あるいはゲイ差別なき世界を描写するBL作品は、両方どちらもホモフォビアと闘うための手段だと肯定的に論じた。

発表後の質問時間にはBLドラマはまだゴールデンタイムに放送されていないという指摘があって、LGBTQドラマがいつから増え始めたのか、そして、メディアにおける性的な描写を巡る曖昧な基準についての質問があった。

両方のゲスト講師の発表はメディアにおけるジェンダーとセクシュアリティの描写とDE&Iについてより深く考える機会を与えてくださった。尾崎裕和氏と堀あきこ氏に感謝している。

付記

本研究活動は2024年度大東文化大学社会学研究所の調査研究活動助成を受けたものである。

Report on Manga-Visual Research Group (*Manbiken*) Study Meetings.

STEWART, Ronald

This is a report on the two study group meetings held this year by the Manga-Visual Research Group (or “Manbiken”). At both meetings guest speakers were invited to present. The first, Hirokazu Osaki is Drama Chief Producer, in the Third Production Centre of NHK’s Content Production Bureau. He was involved in the creation of NHK morning TV drama *The Tiger and Her Wings* (*Tora ni Tsubasa*). He spoke about this drama, which has a protagonist modelled after Japan’s first female lawyer, giving its production background before focusing on issues of DE&I. The second guest presenter was Akiko Hori an Assistant Professor in the Department of Sociology, Kwansei Gakuin University, giving a presentation titled, “Why BL research: perspectives on gender and sexuality?” The presentation gave an overview of the history of BL (Boys Love), its changes and current situation, then discussed the importance of studying BL culture and media focusing on gender and sexuality perspectives.